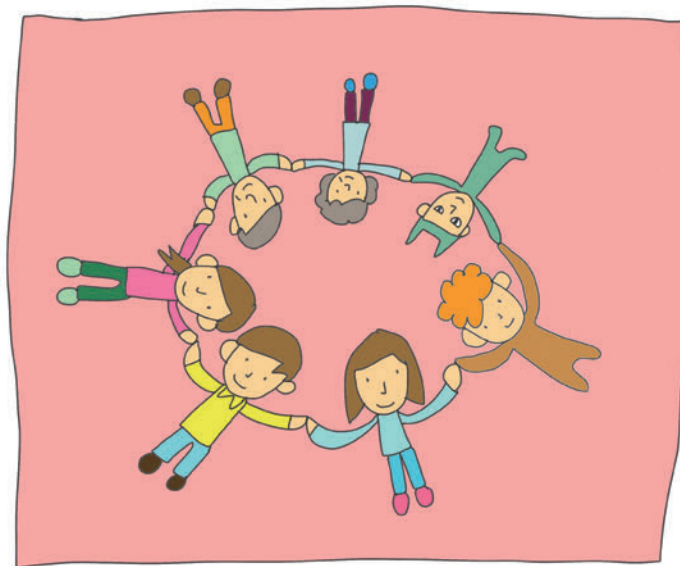


依存症・アディクションが
あるかもしれない人の理解を深める

『問題解決しない事例検討会』

ハンドブック

追補版



作成 厚生労働省「依存症に関する調査研究事業」分担研究班
『問題解決しない事例検討会』を用いた地域連携モデルの効果研究」

監修 田中和彦・西念奈津江・佐久間寛之

”ツール”ではなく”理念”としての『問題解決しない事例検討会』 —追補版によせて—

『問題解決しない事例検討会』のハンドブックが発行されて、2年が経とうとしています。この間に『問題解決しない事例検討会』は全国各地で50回以上開催され、2023年度にはのべ1400名もの方にご参加いただきました。様々な立場で「人」にかかわる私たちが、そのかわりに行き詰まりを感じた時に、あえて「問題解決」を目的とせず、「どんな人なんだろう？」とその「人」に対する理解を深めようとする、一見遠回りにも思えるこの事例検討会に、多くの方が関心を寄せてくださいました。

印象的なのは「雰囲気が良い」「熱気・活気がある」「楽しい・面白い」「批判しない・されない」「発言しやすい」「ぜひやってみたい」といった参加者からの感想です。参加者が互いの価値観や個性・多様性を尊重しあう対等な関係性や、どんな発言も責められない・非難されないといった心理的安全性への配慮が、この事例検討会を支えているようです。そして、参加者とともに自由な発想で仮説を立てることを主たる目的とするこの事例検討会には、その「人」を様々な視点からとらえ直し、あらたな気持ちでかかわり続けていくモチベーションを取り戻す、「支援者支援」の側面があることもわかってきました。

一方で、「自分たちで開催するのは難しい」「ファシリテーターがいない・できない」「本当に問題解決しなくていいのか」といった意見も少なからず寄せられました。実際に開催してみた方からは「ハンドブック通りにやっても、うまくいかない」「結局何をやっているのか、よくわからなかった」といった声も聞こえてきました。研究班で議論を重ねる中で、そうした背景には『問題解決しない事例検討会』の理念が十分に伝わっておらず、単なるツール、事例検討会のマニュアルとして誤解されているのではないか、という懸念も浮かび上がってきました。

『問題解決しない事例検討会』は何を大切にし、私たちはそこにどんな姿勢で取り組んでいけば良いのでしょうか。この追補版ハンドブックでは、その理念を詳しく記載しました。この事例検討会の根底にある理念が、決して大きな会場で大勢の人を集めて開催する時だけのものではなく、日々の私たちの実践とともにあり、私たちと私たちがかわる「人」とが心地よくつながり続ける、その一助となることを願っています。

Deeper understanding, not focusing on problem solving.

はじめに

このハンドブックの初版は厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）『ギャンブル等依存症の治療・家族支援に関する研究』の分担研究班による研究成果のひとつとして2022年3月に発行されました。

わたしたちは当初、依存症に関わる医療、保健、福祉、教育、法務、矯正その他の領域の支援者と、家族そして本人が、継続的かつ包括的に連携し協力できる体制づくりを目標に、その基盤となる支援マニュアルを作成しようと考えていました。

ところが、全国の精神保健福祉センターを対象としたアンケート調査の結果からは、医療体制や回復支援施設をはじめとする社会資源の充実度に違いがあること、それに伴い各地域が抱える課題も多様であることが明らかになりました。これまでに指摘されている依存症全般におけるトリートメントギャップ（診断基準を満たす人の多くが治療につながっていないこと）の大きさ、医療だけでなく生活支援の視点を取り入れたかかわりの重要性、また支援に携わる人たちの依存症全般に対する苦手意識や忌避感情なども踏まえた議論を経て、わたしたちがたどり着いたのは「各地の多様な課題を網羅するマニュアルなんて作れない！」ということでした。

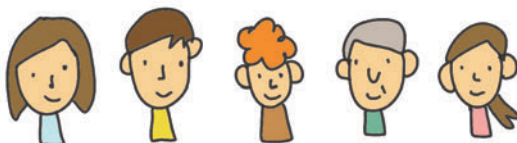
一方で、目標を達成するうえで、わたしたちが見出したどの地域・どの依存症にも共通する課題、それは「いかに目の前の『困っている人』に対する理解を深められるか」ということでした。誰とどのように連携するにせよ、「困っている人」に対する理解なしには始まりません。そのために今、わたしたちは『問題解決しない事例検討会』を提案します。

この事例検討会では、かかわりに行き詰まりを感じていた事例提供者の多くが「早くあの人に会いたい」と軽やかな足取りで会場をあとにしていきます。ともに考えともに悩み、互いにねぎらい励ましあうことで、参加者相互の理解も深まり、地域にはゆるやかなネットワークが形成されていきます。この実践はきっと、様々な課題とともにある、みなさんの地域それぞれにおける、心地よい連携のありようを紡ぎ出す新たな一歩となることでしょう。

さあ、このハンドブックを手に、一緒に実践していきましょう。

目次

— 追補版によせて —	2
1 はじめに	3
2 導入編 問題解決しない事例検討会	
『問題解決しない事例検討会』とは	5
本当に「問題解決」しなくていいの？	7
3 実践編 問題解決しない事例検討会	
事前準備	8
[コラム] ちょっとひと工夫で、雰囲気づくり	9
進め方	10
①自己紹介	
②「困っている人」の概要説明	
③質問タイム	
④理解・解釈タイム	12
⑤理解・解釈を事例提供者とわかちあう	13
⑥クロージング	
4 Q&A 編 うまくいかない！さあどうする？	14
[コラム] まず聴くことから始めよう	18
5 『問題解決しない事例検討会』の理念と可能性	19
6 おわりに	22

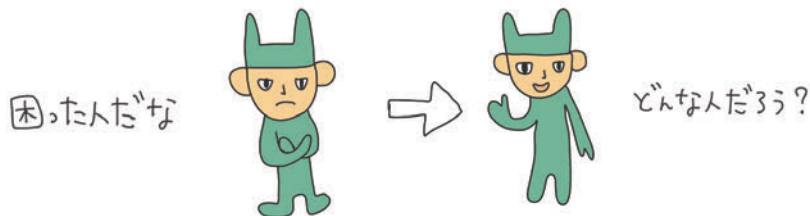


■『問題解決しない事例検討会』とは

この事例検討会はその名の通り、問題解決を目的としていません。目的は「本人に対する理解を深めていくにあたっての仮説を立て、その人を捉えなおすこと」。次のような姿勢を大切にします。

①「困った人」ではなく「困っている人」

かわりに行き詰ったとき、目の前の人を「困った人」に思えてしまうことがよくあります。ここでは「困った人」ではなく「困っている人」と捉えなおします。「困った人」にどう対処しようか、「問題」をどう解決しようか、と考えるのではなく、目の前にいる「困っている人」に対する理解（どんな人かな？何に困っているんだろう？何を望んでいるんだろう？）を深めることに焦点を当て、わたしたちなりの「仮説」（～～なのではないか？）を立てていきます。



②「あなた（困っている人）のことはわからない」が前提

「こんな人なのかも知れない」「こんなことに困っているのかも」「本当はこうしたいのでは？」というのは、あくまでもわたしたちが立てた「仮説」に過ぎません。この「仮説」は、その後の本人との対話の中で繰り返し「検証（確認）」していきます。本人から「それは違う」と言われた時は「この仮説は違っていた」と素直に受け止め、さらなる対話を深めるきっかけとしていきます。的外れな「仮説」が新たな気付きのきっかけになることも珍しくありません。対話の中での「検証」なしに、勝手に「わかったこと」にはしません。

③ 本人のいないところで、何も決めない、決めつけない



本人がいないところで、「問題」に対処する具体的な手段やスケジュールなどは決めません。そもそも問題解決を目的としていませんから、これらを決める必要もありません。悩み、考え、選び、決めていくのは本人です。その権利と主体性、そしてペースとタイミングを尊重し、本人に備わる力を信じて、ともに歩みます。その準備として、ここでは本人の理解を深めるための「仮説」づくりに取り組みます。



④ 参加者が互いの価値観や個性・多様性を尊重する



問題解決を目的としないので、結論や方向性をめぐるパワーゲームは起こりません。参加者それぞれの豊かな感性で「困っている人」の暮らしに思いをめぐらせ、穏やかな対話を続けましょう。その中でわたしたちは、日々押し寄せる「問題」に混乱する中で見失いかけている、「困っている人」たちに対する人としての当たり前前の敬意を取り戻していきます。

「困っている人」だけでなく、参加者も互いを尊重し合う『問題解決しない事例検討会』には、いつまでもお開きにしたくないような、心地よい時間が流れます。その心地よさが自然と「困っている人」に対する「もっと知りたい、話したい」というモチベーション、そして参加者同士のゆるやかなつながりを育てていきます。



■ 本当に「問題解決」しなくていいの？

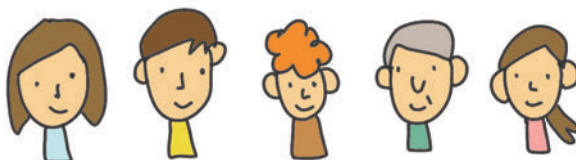
依存症やそれに伴う困難を抱えて「困っている人」の周りでは、次から次へと様々な「問題」が起こることがあります。そんな時、少しでも早くこの状況をなんとかしなきゃ！と思う誠実で生真面目な人ほど追い詰められ、その熱心さゆえ、時に孤立してしまうこともあります。

研修などではよく「〇〇依存のある人へのかかわり方を教えて欲しい」「どうしたら〇〇をやめさせられますか」「二度とやらないようにして欲しい」といった声が寄せられます。

次々と「問題」を引き起こす「困った人」に問題を解決する力なんてあるはずがない、と思うかもしれません。わたしたちが問題を解決「してあげないと」大変なことになる！と思うかもしれません。そもそも、わたしたちが「問題」と認識している事柄は、いったい誰にとって、何が「問題」なのでしょう？

ここで大切なのは、生きること、暮らしの主体は誰か？という問いに立ち返ることです。困難な状況を切りひらいていく力は、誰にも必ず備わっています。ただ、様々な事情が重なり、その力が発揮しづらい状況で、生きづらさを抱え、思い通りに暮らせなくなっていることに「困っている」と捉えなおします。

わたしたちの役割は「困難な状況を切りひらき生き抜いていく力はその人自身にこそ備わっている」と信じることで、そして彼らがその力を最大限に発揮できるようになることに対する息の長いサポートです。そのために必要なのは、わたしたちの目の前にいる人が「どんな人」で「どう生きてきたのか」「いま何に困っているのか」、そして「どんな生活を送りたいと思っているのか」「どう生きたいのか」を、より深く理解していこうとすることなのです。



3 実践編

■ 事前準備

《開催日時の設定》

時間は2時間程度あるとよいでしょう

《参加者》（数名～20名程度まで可能）

必ずしも、参加者全員が本人のことを知っている必要はありません。その場合は、特に個人情報の取り扱いに留意しましょう

※本人は参加しません

《役割分担》

事例提供者：事前に簡単なレジュメ（A4用紙1ページ程度）を用意しておきます

進行役：事例検討会の司会進行をします

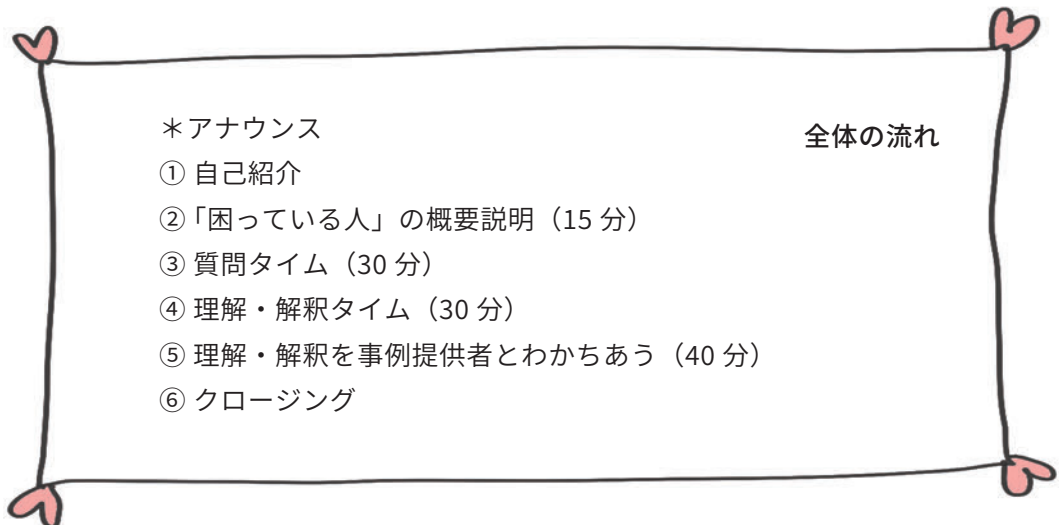
板書係：主に③④で参加者の発言を板書します

参加者：素直な思い・疑問をのびのび発言しましょう

※開催前日までに参加者にこのハンドブックをお渡ししておきます。

（資料のダウンロードについては巻末参照）

10ページから、実際の『問題解決しない事例検討会』の進め方をご紹介します。



コラム ちょっとひと工夫で、雰囲気づくり

初めて顔を合わせる人が参加する事例検討会では、開催する側も、参加する側も、思った以上に緊張するものです。会場に向かう道すがら、あるいは開始を待つ時間、ドキドキしたり、アウェー感があったり、心細かったりすることもあるでしょう。

そんなときでも、例えば訪問先の受付で「事例検討会に来られた方ですね？会場はあちらですよ」「〇〇さんですね、お待ちしていました」と声を掛けられたりするだけで、ちょっとホッとしませんか？こうした、受付での対応や案内掲示（※）などの配慮は、ほんのひと手間ですが、参加者に対する歓迎のしるしです。

会場では例えば、セルフサービスで選べるドリンクやちょっとつまめるお菓子などを用意するのも良いですね。どれにしようかな？何を選びました？お先にどうぞ、など初対面の人とでもちょっとした会話が始まるかもしれません。

こうした小さな工夫が、事例検討会が始まる前のアイスブレイクとなり、リラックスした雰囲気づくりに一役買ってくれます。

※ポスターがダウンロードできます。巻末参照

できる範囲で準備します



■ 進め方



最初に進行係からのアナウンスで

1. 今日『問題解決しない事例検討会』であること
2. 目的は「本人に対する理解を深めていくにあたっての仮説を立て、その人を捉えなおすこと」
3. このハンドブックに沿って進行すること
4. 参加者同士のフラットな関係を大切にし、自由に意見を交わせるよう、敬称は“さん”で進めることを伝えます

① 自己紹介



名前、職種、所属、「困っている人」とのつながりなどを、ごく簡単に伝えます。

② 「困っている人」の概要説明（15分）



事例提供者から「困っている人」に関する基礎情報や経過などについて、レジュメをもとに10分～15分ほどで簡単に説明します。



レジュメはA4用紙1ページ程度、詳細な資料の準備は要りません
事例検討シートの作成例を掲載しています（巻末参照）

③ 「困っている人」に関する質問タイム（30分）



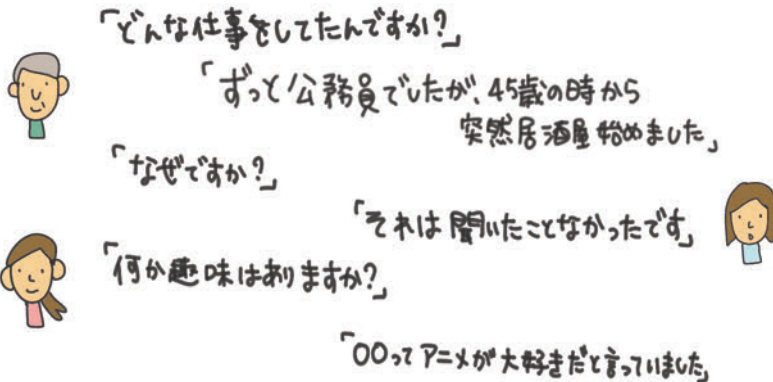
参加者と事例提供者の一問一答形式で進めていきます。

《 進行役 》

参加者に「困っている人」本人への理解を深めていく質問を促します。

《参加者》

「困っている人」本人への理解を深めていく上で知りたいことを質問します。その人柄やこれまでの暮らしぶり、好きなことや嫌いなこと、嬉しかったことや悲しかったこと、いま何に困っているのか（いないのか）、本人のありようを参加者みんなで捉えなおすという気持ちで尋ねていきましょう。



《事例提供者》

質問に対し、自分が知っている範囲で回答します。知らないこと、わからないことはありのまま「わかりません」で大丈夫。ここでは、自分にはなかった視点、重視していなかったことや、本人に聞きそびれていたことに気付くことが大切です。

突拍子もないユニークな質問も、好奇心を持って受け止めましょう。「ここではなんでも聞いていいんだ」「わからないことがあってもいいんだ」というオープンな雰囲気の中で、新たな「仮説」が生まれる土壌と関係性が育まれていきます。



この段階では、本人に関する質問だけをします
本人に対する解釈（「～～だと思う」「～～なのではないか？」）や、事例提供者に対する意見や助言（「～～すればどうか？」「～～しなかったのか？」）はしません

事例提供者からの回答は、全てを書かずにワンセンテンスでシンプルに板書し、全員で共有できるようにしましょう

④「困っている人」に対する理解・解釈タイム（30分）



《進行役》

参加者に、これまでに共有した情報を踏まえた理解・解釈についての発言を促します。「問題解決」でなく本人への理解を深めるための「仮説」を立てること、理解や解釈に「正解／不正解」はないこと、を参加者とも確認しながら進行していきましょう。

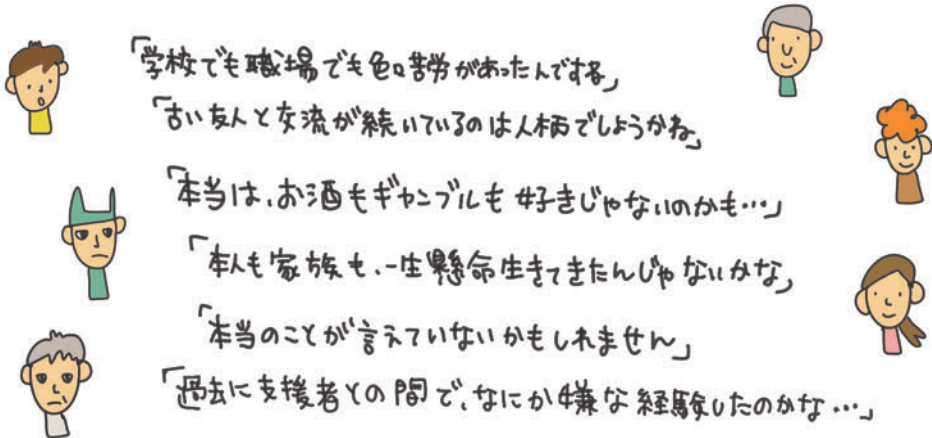
《参加者》

事例提供者に対し、これまでに共有した情報を踏まえ、「困っている人」に対する理解・解釈を伝えます。

と言っても、あくまでも「仮説」としての理解・解釈ですから、「正解／不正解」はありません。想像力を働かせて、どんどん発言しましょう。多くの仮説を立てることで、とらえ方の幅も豊かに広がります。

《事例提供者》

ここはちょっとひとやすみ。聞き手に徹します。



進行のつり



この段階では、解釈・理解だけを伝えます
ここでも、事例提供者に対する意見や助言（「～～すればどうか？」「～～しなかったのか？」）はしません

参加者から出された解釈・理解は、ワンセンテンスでシンプルに板書し、
全員で共有できるようにしましょう

⑤ 理解・解釈を事例提供者とわかちあう（40分）



ここからは全員でこれまでの質問と、「仮説」としての解釈・理解を踏まえ、新たに得られたことをわかちあっていきます。

事例提供者からはこれまでひとりでは得られなかった「困っている人」に対する「こんな捉え方があったのか!」という気付きや納得、さらには新たな疑問、知りたくなったことなどについて伝えましょう。参加者からも、ここまでのプロセスで得た気付きを伝えましょう。

また「困っている人」に対する理解だけでなく、自分自身の「困っている人」たちに対する捉え方やかかわりのクセや偏りに気付くこともあるでしょう。そうした気付きこそ、ぜひこの時間にわかちあいましょう。自分の胸の内だけにある気付きも、わかちあうことで、他の誰かの新たな気付きのきっかけになったり、時には他の誰かが背負っている重荷を下ろす助けになったりもします。



「こんな風に考えたことはありませんでした」
「そんな視点があったとは」
「こう思ったのは私だけじゃなかったんですね」
「それは新しい発見」



「その可能性もあるかもしれません」
「早速私たちも今からやってみようかな」
「こうだったらいいですね」



なるほど

⑥ クロージング



最後にお互い謝意を伝え合いお開きにしましょう。

■ うまくいかない！さあどうする？<Q&A>

『問題解決しない事例検討会』に慣れないうちは、色々戸惑ったり、うまくいかないと感じたりすることがあるかも知れません。

その背景にはわたしたちの焦りや不安、そして「一刻も早く問題を解決したい」という「問題解決志向」が影響していることが少なくありません。でも問題解決しなくていいのです。焦らず、肩の力を抜いて、やってみましょう。



お悩み① 誰も発言してくれません

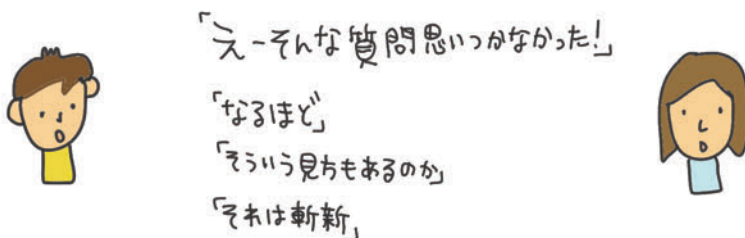


人前で発言したり、自分の意見を述べたりするには少し勇気がいりますね。間違っていたらどうしよう...こんなことを思うのは自分だけかな...誰かに否定されたらどうしよう...

『問題解決しない事例検討会』では、誰のどんな発言であっても歓迎します。職種や職域、個々のキャラクターや価値観、その個性と多様性を尊重し、否定しません。

誰も思いもつかないようなユニークな発言が、新たな気付きや展開のきっかけになることもよくあります。これが多様性を尊重して対話することの醍醐味です。「正解／不正解」はありません。率直な思いを述べてみましょう。

特に質問タイムでは、どんな質問も歓迎されるオープンな対話の場であること、答えられなくても何の問題もないことを共有しておくといいでしょう。その安心感があると次々手が上がります。聞く側は好奇心を持って耳を傾けましょう。



お悩み② 気が付けば「問題解決志向」の展開になってしまいます

いざ始めてはみたものの、気が付けば「どうしたらいいのでしょうか?」「～～してみてもどうですか」「～～すべきでしょう」といった「問題解決志向」の展開になってしまっていた、ということも珍しくありません。

こんな時には気付いた人から声をあげてみる、あるいはそっと進行役に声をかけてみると良いでしょう。進行役はあらためて、今回は『問題解決しない事例検討会』であり、その目的は「本人に対する理解を深めていくにあたっての仮説を立て、その人を捉えなおすこと」であることを伝え、仕切りなおしてみましょう。

無意識のうちに「なんとかしなきゃ」という「問題解決志向」にとらわれてしまう、わたしたち自身の思考のクセに気付くこと自体に大きな意味があります。

お悩み③ クライアントのことや、支援の方向性、結論を決めつけたり誰かの発言を否定したりする人がいます

こんなときにも『問題解決しない事例検討会』の目的や約束ごとを再確認します。進行役からは、発言に対する謝意を伝えつつ、このハンドブックを手に「今回については、このやり方で進めていきます」と伝えましょう。

「こんな人はね、もう入院するしかないよ」

「こんな人はね、どこも入院させてくれないよ」

「あ、それじゃあだ」

「こんな言い方じゃうまくいかないよ」

「どうしてこうなったんだ?」

「あなた全然わかってないわ」



「今日は『問題解決しない事例検討会』です」

お悩み④ 依存症・アディクションに詳しい人がいません



「困っている人」が何らかの依存症・アディクションにともなう問題を抱えているからといって、そのことばかりに注目していると、その人たちが抱えている生きづらさの本質を見誤ることが多々あります。依存症・アディクションばかりにとらわれず、広い視野、さまざまな側面から「困っている人」の理解を深めようとする姿勢を大切にしましょう。

全国の都道府県と政令指定都市には精神保健福祉センターがあり、依存症治療拠点機関、依存症専門医療機関の設置も進められています。地域によっては民間の回復施設等もあります。そうした機関・団体の担当者に出席を依頼してみるのも良いでしょう。遠方の場合にはオンライン会議ツールも積極的に活用していきましょう。



依存症対策全国センター

依存症専門医療機関、治療拠点の一覧リストがあります

お悩み⑤ そもそもみんな忙しくて集まりません



事例検討会で何よりめんどくさいのは「日程調整」ですね。なかなか調整がつけられない、そんなときはひとまず集まれる人だけでやってみましょう。

必ずしも2時間取れなくても構いません。『問題解決しない事例検討会』を通して「困っている人」への理解と、相互の理解を深め、心地よいゆるやかなつながりを持つことは、無理難題を背負い、孤軍奮闘していたそれまでのかかわりの重苦しさを確実に変えていきます。

またその後の「困っている人」とのかかわりで、自分が困った時、迷った時、急き立てられるような気持ちになった時には、落ち着いて『問題解決しない事例検討会』で集った仲間に話してみましょう。きっとまた「ハッ」とするような気づきもらえるはずです。それでもダメなら、また『問題解決しない事例検討会』を、集まれる人たちでやればいいのです。

お悩み⑥ 上手にまとめることができません



心配ご無用、そもそもまとめる必要がありません。

『問題解決しない事例検討会』の目的は、「困っている人」に対する理解を深めようとすることにあります。なぜその人たちの暮らしにはアディクションがあるのか？本人にとってそれはどんな意味があることなのか？そのことで本人やその周囲ではどんなことが起こっていて、どう思っているのか？

そうした問いに対する、わたしたちの多様な理解や解釈のわかちあいを、ひとまとめにする必要はありません。しかもこれらはあくまでも「仮説」ですから「この人はこういう人でこう思っているのだ」と結論付けて、勝手に「わかったつもり」にならないことが大切です。「仮説」は、その後の本人との対話の中で、繰り返し検証していくものです。わたしたちは常に「本人のことは（本人にしか、時には本人にさえ）わからない」を前提に「困っている人」に関心を寄せ続け、互いの理解を深めあえるような対話を通して、かかわり続けることを大切にしていきたいでしょう。

「〇〇さんは こういう人なんですね」
「でも こんな一面もあるよね」 「それからこんな一面も」
「それ本音かな？」 「別の日はこうも言っていたよね」
「どれが本心なんだろ??」

まとめなくて
OKです



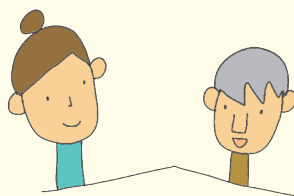
コラム まず聴くことから始めよう

最近では、アルコール、薬物、ギャンブル等だけでなく、ゲームやインターネット、買い物、さらには窃盗や暴力、痴漢や盗撮などといった行為も「アディクション（嗜癖 [しへき]）」として注目されるようになり、相談も増えています。とはいえ、その相談に至るまでには、長期間を要していることも珍しくありません。

相談者からはよく「誰かに相談するなんて、考えられなかった」と聞きます。その背景には、自分（や家族）の行為に対する恥ずかしさや罪の意識、責められたり、とがめられたりすること、あるいは捕まることへの恐れがあります。また、相談しようにも、様々な問題が複雑に絡み合っていて、どこの誰に、何から話せばいいのかわからなかった、という人も少なくありません。あるいは、過去に相談した際にひどく傷つき絶望し、相談なんて二度としたくなかったけど…という人もいます。

そんな分厚い壁を乗り越えた相談者がようやく目の前に登場した時、わたしたちには何ができるでしょうか。その人たちが困っている誰かの何かをやめさせること？それともリストを広げて専門機関や専門家を紹介すること？果たしてそうでしょうか。まずはその人の声にじっくりと耳を傾け、「よく話してくださいました」と声をかけてみませんか。

「アディクション」の反対は「コネクション」。まずは、恐れずに、つながってみることから始めていきましょう。



『問題解決しない事例検討会』の理念と可能性 Deeper understanding, not focusing on problem solving.

その人から見たその人の景色を理解できるように

一般的に事例検討会に出される事例は、いわゆる「処遇困難事例」として語られることが多くあります。しかし私たちが「問題」だと思っていることは、果たして誰にとって、何が問題なのでしょう。ひょっとしたら支援者が見ている「問題」は、その人からはまったく違った文脈で語られるかもしれません。「専門家から見て問題なのだから」と思うかもしれませんが、果たして専門家のもつ物差しは適切なのでしょうか？支援者とその人が持つ物差しは、目盛りが違うかも知れません。それどころか、まったく違うものを測っているかも知れません。これでは対話はなかなか噛み合いません。そうしたときに、『問題解決しない事例検討会』の理念が役に立ちます。

『問題解決しない事例検討会』で取り組むのは「その人と、その人を取り巻く環境・社会構造、そしてその人の生きてきた歴史を含めた全人的理解の深化」です。その構造は「情報収集」と「分析（仮説生成）」で、極めてシンプルです。このシンプルなプロセスで、私たちはあらゆる方向からその人を理解しようとすることに努めます。まるでその人を深掘りするドキュメンタリーを作るかのように、さまざまな角度からその人に光を当てながら、問いを立て、仮説を生成し、解釈を深めていきます。



どうしてそうなっているんだろう？

『問題解決しない事例検討会』がそのプロセスで大切にしているのは、ソーシャルワークアセスメントの考え方です。大谷はソーシャルワークアセスメントについて「クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するためになされる、情報収集と分析のプロセスであり、ワーカーは専門的価値に基づき、知識を導出し、クライアントは固有の経験値に基づき、協働して目の前の現実を解釈するプロセスである」と述べています（大谷：2013）。つまり、支援者に求められるのは「支援者から見たその人を理解すること」ではなく、「その人から見たその人の景色を理解できるように努めること」だということです。

私たちが『問題解決しない事例検討会』で出会う多くの解釈は、あくまでも、私たちの解釈のひとつに過ぎません。その解釈が合っているかどうかは、その人自身にしかわからない（時に、ご本人にさえわからないこともある）、という謙虚さが求められます。そのような支援者としての「わきまえ」を持ちながら、その人のことを簡単にわかった気にはならず、でもその人のことを理解しようとする思いで、私たちが「問題」と捉えている事柄が、その人にとってはどんな意味や必要性があるのだろう、その人からはどんな景色が見えているだろう、といった解釈を深めていきます。



どんなふうに見えているんだろう？

その人の主体性を尊重するかかわりのために

では『問題解決しない事例検討会』には、どのような利点や可能性があるのでしょうか？まず『問題解決しない事例検討会』を通して、その人に対する理解やとらえ方が変化することが挙げられます。ひとつの事例について、2時間近くかけて取り組みますので、事例提供者が気づいていなかった視点や解釈が共有されていきます。そのことにより、その人だけでなく、その人にまつわる出来事、周囲との関係性などに対する理解やとらえ方も変化していきます。例えば不健康で不適切な行為だと思っていたアディクションが、実はその人にとってかけがえのない意味ある行為だったのかも知れない、ととらえ直されるような変化です。それは同時に、自分自身の支援観や支援にたずさわる際の傾向への気づきへとつながっていきます。

事例検討に出される多くの事例では、かかわりが行き詰まり、支援者の肩にも無意識に力が入り、構えてしまっていることも少なくありません。そのような反応の背景に、クライアントへのネガティブな感情が影響していることもあるでしょう（陰性逆転移）。こうした時『問題解決しない事例検討会』を通してクライアントの言動に対する解釈が深まることで、支援者自身の肩の力が抜けていくことがしばしばあります。これまでのかかわりを批判されない、責められないことが保障された「安全な場所」で、参加者とともに事例に向き合うことで、事例提供者自身も孤立から解放されていきます。そのことは、次にクライアントに対面する際の支援者自身の姿勢の変化へとつながっていくでしょう。

このように『問題解決しない事例検討会』には、治療や支援にたずさわる人たちへの支援、すなわち「支援者支援」の側面もあります。治療や支援を取り巻く環境では常に「問題解決」を求められています。その「問題解決」から、あえていったん距離をおくことで、支援者とクライアント間、さらには支援者間の緊張関係が緩和されます。『問題解決しない事例検討会』は「問題解決しない」と銘打ってはいますが、決して問題の解決を否定しているわけではありません。早急な「問題解決」を焦る前に、まずは支援者としてなすべき「その人への理解の深化」をていねいに行っていこうというメッセージなのです。この実践の中で支援者自身が孤立から解放され、勇気づけられ、ひとりでは出来ないからこそ様々な人たちと連携し、引き続きこの仕事に向き合っていく力を取り戻していきます。

支援者自身のエンパワメント、このことが、支援者に求められる根源的な価値である「その人の主体性を尊重すること」につながります。成果主義や問題解決志向が強まった社会の中で、本人を置き去りにした支援者主導のかかわりによって、多くのクライアントの尊厳が傷つけられ、その主体性が侵害されています。いま、アディクション領域にとどまらず、高齢者や障害者、司法、矯正、教育など、幅広い領域の多機関・多職種の間で『問題解決しない事例検討会』の取り組みが広がってきています。この取り組みがそれぞれの現場で、もう一度自分自身のかかわりのあり方を問い直す機会として、そして「どうしよう」という問題解決志向から「なぜこうなっているんだろう」という理解を深めるための問いを持つきっかけとなればうれしいです。

参考文献：大谷京子「ソーシャルワークにおけるアセスメントー研修プログラム開発の試み」『日本福祉大学社会福祉論集』129号日本福祉大学、2013



おわりに

依存症・アディクションの領域には、その困難を経験した人たち（アディクト）自身による AA や断酒会、NA、GA をはじめとする、様々なセルフヘルプグループがあります。また彼らが運営する回復支援施設なども各地にあります。その活動は、彼らが抱える困難に関心を寄せる人がほとんどいなかった頃から現在まで脈々と続いてきました。彼らはいつものときも同じ悩みを持つ仲間たちのそばにいました。公的な支援もマニュアルもない中、時には心無い差別や偏見にさらされながらも、互いに手助けしたり／されたりしあう関係性のもと、それぞれの個性を活かし、多彩な知見とアイデアで、困難な局面を何度も乗り切ってきました。

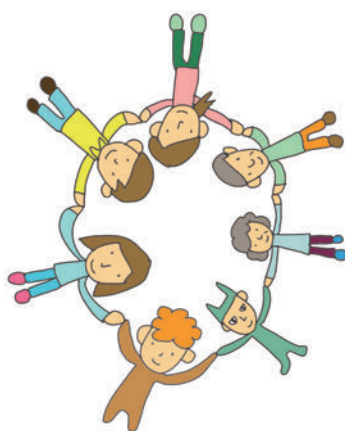
「依存症は病気です」。広くそう知られるようになった今、多くの人が彼らの抱える困難を少しずつ知るようになりました。その一方で、彼らは「依存症の患者」「治療や支援が必要な人」として、治療や支援「される側」として一面的に捉えられるようにもなってきました。支援「する側」は、良かれと思って彼らの行動を変えさせよう、コントロールしようとして一生懸命です。そして、そのことに対して彼らから「NO」を突きつけられた時、専門家にその解決を委ねようと考え、多機関・多職種連携をしようとする。病気なのだから専門家のいる医療機関での治療（と問題解決）を期待する、というのは、ある意味当然の流れかもしれません。

今回わたしたちが実施したアンケートで明らかになったのは「紹介できる医療機関がない」「治療プログラムが実施されていない」「専門的なスタッフがない」といった「医療資源の不足」と「専門家不在」を嘆く現場の声でした。専門医療機関がないのに、専門家がいないのに一体どうすればいいのか？専門医療機関・専門家を増やして欲しい、それが無理なら、せめてマニュアルだけでも用意して欲しい、と。一方で医療現場においては、問題解決への過大な期待を寄せられ責任や負担を感じたり、診断をつけることにとらわれたりするなどして、対応に苦慮している現状がありました。

わたしたち研究班は今回、依存症・アディクションにまつわる困難を抱える人たちに対する多機関・多職種連携による支援のあり方のひとつとして、この『問題解決しない事例検討会』を提案しました。

わたしたちの考える多機関・多職種連携は、「困っている人」の依存症・アディクションとそれに関わる困難を、専門医療機関・専門家ばかりを過度に頼って（＝依存して）解決することを目的とはしていません。大切なのは、みんなが互いを尊重しあってゆるやかにつながり、彼らの暮らしや生きざまに関心を寄せ理解を深めながら、そっとそばに居続けられること。それは言い換えれば、彼らもわたしたちもひとりぼっちにならない、ということです。これなら、たとえ身近に専門医療機関や回復支援施設がなくても、専門家がいなくても、誰もが今から始めることができます。そしてこれはまさに、世界中のアディクトたちが長年にわたり重ねてきた、互いに手助けしたり／されたりしあう関係性のもとでの実践そのものなのです。

新たな多機関・多職種連携の最初の一步、それは、彼らの生きた軌跡と長年の実践、その価値に対するリスペクトからこそ始まるものだと言えるでしょう。



I can't We can

追補版

問題解決しない事例検討会ハンドブック

2024年4月発行

《監修》 田中和彦・西念奈津江・佐久間寛之

《主任研究者》

松下幸生／独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター

《分担研究者》

佐久間寛之／独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター

《研究協力者》

田中和彦／日本福祉大学

西念奈津江／北陸HIV情報センター、HARP(北陸アディクションリカバリーパートナーズ)

青木理恵 阿部かおり 大越拓郎 佐久間寛之 佐久間みのり 野村照幸

早津さやか 村山裕子

／独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター

伊東寛哲／独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター

植田秀孝 福田貴博 前田大輝／医療法人見松会あきやま病院

石川章旗 幸地睦子 杉浦彩乃 手塚幸雄

／医療法人タビック沖縄リハビリテーションセンター病院

中村茜里／医療法人社団岡部診療所

山中慎也／医療法人建悠会吉田病院

菅原直美／吉祥寺リネン法律事務所

杉浦真由美／北海道大学

長徹二／旭川医科大学

狩野俊介 紀司かおり／岩手県立大学

野口晃／かがやき在宅診療所

登坂由香／医療法人松原会七尾松原病院

《イラストと装幀》 ぶるすあるは

このハンドブックは厚生労働省「依存症に関する調査研究事業」の分担研究班「『問題解決しない事例検討会』を用いた地域連携モデルの効果研究」(旧班名『ギャンブル障害の新しい地域連携モデルの効果研究』)による研究成果のひとつとして作成されました。

本ハンドブックの文章、イラスト等の無断転載はお控えください。

研究版ウェブページ（さいがた医療センター Sai-DAT 内）

ダウンロードできます

1. ギャンブル等依存症インテークシート
2. ハンドブック PDF
3. 問題解決しない事例検討会 ポスターと進行表
4. 事例提供シートの作成例



お問い合わせは、ウェブページからお願いします